第Ⅱ章　佐渡金銀山遺跡の概要

第Ⅱ章　佐渡金銀山遺跡の概要

１．佐渡市の概要

（１）佐渡市の概要

位置　佐渡市は佐渡島全域をその行政区とする。佐渡島は、本州・北海道・九州・四国を除くと、沖縄本島に次ぐ大きさの島で、新潟港（新潟市）の西方約45km、直江津港（上越市）の北方約78km、寺泊港（長岡市）の北西方約46kmの日本海上に位置している。本州とは、両津航路（両津港～新潟港)、小木航路（小木港～直江津港)、赤泊航路（赤泊港～寺泊港）の海上３航路と、佐渡空港から新潟空港までの航空路で結ばれている。

地勢　佐渡島の面積は約855.25 k㎡、周囲の海岸線は281.7 kmを測り、山林と雑種地が島面積の80％以上を占めている。佐渡島の地勢は激しい造山活動の影響を受けて多様性に富み、山地、海岸段丘、低地などから形成される。北東から南西方向には、標高1,173mの金北山を最高峰とし延長40kmに伸びる大佐渡山地と、標高645mの大地山をはじめとする比較的低い山並みが40kmにわたり連続する小佐渡山地が平行して屹立し、大佐渡山地南麓、小佐渡山地北麓には扇状地が形成されている。中央部を島内で流域面積最大の国府川が流れ、この流域に開けた国中平野が形成されている。また、島の西側の真野湾沿いには浜堤および砂丘帯が発達している。その他、島南西部の羽茂川沿いにも小規模な平野が形成されているほか、沿岸には海岸段丘が発達する。

人口　国勢調査による統計を取り始めて以来、佐渡市の人口のピークは昭和25年(1950)の125,597人であった。平成24年(2012)1月現在の佐渡市の人口は62,863人で、最大時の約半分となっている。また、佐渡市の平成17年(2005)の国勢調査による老年人口比率（65歳以上の人口割合）は35.3％と、全国の老年人口比率20.8％や新潟県の老年人口比率24.4％を大きく上回っている。年少人口（14歳以下)、生産年齢人口（15歳以上64歳以下）は減少傾向にあり、老年人口については、増加の傾向が続いている。

産業　就業者数は平成17年(2005)の国勢調査で36,314人で、産業別構造は、第1次産業24.2％、第2次産業21.4％、第3次産業54.3％となっている。第1次産業は、従事者の高齢化と就業者数の減少や深刻な担い手不足が懸念され、流通価格の低迷や生産コスト増加による採算性の悪化も課題となっている。第2次産業は、1工場当たりの従業者数は10人台と、小規模の事業所が多数を占めている。第3次産業は、平成16年(2004)と比べ、合計事業所数は126（9.3％)、従業者は391人（7.2％)、年間販売額は6,290百万円（5.4％）減少している。また、観光客の入込数は、平成 3年の121万人をピークに減少を続け、平成22年(2010)には54万人台にまで落ち込み、佐渡観光の魅力の再構築が課題となっている。

行政　明治4年(1871)の廃藩置県によって佐渡は相川県となったが、同9年に新潟県に合併され、同21年の市制・町村制施行後は７町51村、同34年の町村合併により5町21村となっ

た。戦後は、昭和29年(1954)に両津市が成立し、同36年には両津市・相川町・佐和田町・金井町・畑野町・真野町・羽茂町・小木町・新穂村・赤泊村の1市7町2村となり、平成16年(2004)の10市町村合併による佐渡市誕生を経て現在に至る。

関連する施策　近年、佐渡金銀山の世界文化遺産登録運動が起こり、平成22年(2010)11月に、『金を中心とする佐渡鉱山の遺産群』として、関連する史跡などが世界遺産暫定一覧表に記載された。また、佐渡市では世界文化遺産を含めた「佐渡３重要遺産」を施策の重点項目に掲げ、市内10か所のジオサイトを対象とする世界ジオパーク事業、『トキと共生する佐渡の里山』として平成23年(2011)世界農業遺産に認定された環境保全型農業の推進を進めている。さらには、自然環境保護にも重点を置き、特別天然記念物トキの野生繁殖事業として、平成20～23年にかけて自然放鳥が行われた。

（２）佐渡の歴史

縄文時代　佐渡で最古とされる縄文時代草創期から早期の遺跡は、南佐渡地方に分布している。草創期の遺跡である小木地区の長者ヶ平遺跡からは有舌尖頭器が出土しており、国史跡に指定されている。縄文前期後葉以降は縄文海進による海面上昇がみられ、国中平野周辺の舌状台地先端部を中心に遺跡が展開する。畑野地区三宮貝塚からは埋葬人骨が確認され、真野地区藤塚貝塚や金井地区堂の貝塚といった貝塚遺跡が数多くみられる。また、三宮貝塚や真野地区浜田遺跡からは貝殻条痕を有する土器が出土しており、同系の土器を有する山陰地方との交流のあったことが推測される。

弥生時代　佐渡に弥生文化が伝えられたのは弥生時代中期中葉で、本州の畿内文化の影響が北陸を経て伝わったとされる。この頃、水田耕作の影響により国中平野低地部で開拓が進み、佐渡の赤玉石や碧玉を用いた玉作集落が成立する。主な遺跡には県史跡に指定される新穂玉作遺跡があり、出土遺物は重要文化財に指定されている。この時期は、青森から福岡までの日本海側の遺跡で佐渡産の管玉が出土しており、装身具や祭祀品が交易品あるいは権力者への貢納品として製作されたと考えられる。玉作遺跡以外では、千種遺跡が著名で、沖積地の地表下約 2m の地点から大量の土器や木製品のほか、イネ等の自然遺物が出土している。

古墳時代　多くの遺跡が沖積地に埋没している可能性が高く、畑野地区畫場遺跡からは、住居跡と想定される方形区画溝が検出されている。また、古墳時代後期後葉になると、真野湾沿岸の段丘上に横穴式石室を伴う円墳が多くみられ、真野地区真野古墳群や相川地区台ヶ鼻古墳が県史跡に指定されている。このように、古墳が佐渡一円ではなく真野湾岸に分布することから、造墓主体となった集団が他国から真野湾沿岸へ渡来したことを想起させる。なお、欽明天皇 5 年(544)には、島の北部の御名部の海岸にツングース系の粛慎人の来着記録があり、日本海を越えた交流があったこともうかがわせる。

奈良時代　この時期に佐渡は一国とされ、養老 5 年(721)に従来の雑太郡のほかに、賀母・羽茂の 2 郡が置かれ 1 国 3 郡となった。当時の国府は真野地区下国府遺跡（国史跡）を含

む一帯と考えられており、周辺には佐渡国衙跡、中央伽藍や塔跡が残る佐渡国分寺跡、雑太郡衙や雑太駅に推定される仲畑遺跡などが所在する。また、この頃沖積地では積極的に水田開発が行われ、真野地区竹田沖条里遺構などもみられるほか、台地上では佐渡国分寺瓦を生産した真野地区経ヶ峯窯跡、佐渡国分寺の瓦のほか9世紀中葉から10世紀前半まで越後全域へ須恵器を供給した羽茂地区小泊須恵器窯跡群（県史跡）などの生産遺跡もみられる。

平安時代　平安中期に編纂された『延喜式』に、佐渡国の等級は大上中下4段階の中国、京からの距離が近中遠の遠国で北陸道の終点とされ、陸奥や出羽国などとともに国土の辺境にして要地であることから「辺要国」に位置づけられていた。天平勝宝 4 年(752)には、中国東北部の渤海国から使者が漂着し、元慶4年(880)には、佐渡国は「本夷狄の地」で「人心強暴」とあることから、律令国家にとって佐渡は北の国境との意識が強かったものと考えられる。真野地区四日町高野遺跡からは、「軍」「団」の墨書土器が出土しており、治安維持のため佐渡国に軍事組織の配置されたことが証明された。また、『今昔物語集』には、治安年間(1021～24)に能登国の鉄掘り集団の長が来島した記録がある。この能登の鉄掘りは砂金を持ち帰っており、佐渡における産金記録の初見とされている。

平安時代後期には、畿内の有力寺社が佐渡へ勢力を伸ばし、近江国日吉神社や越前国気比神社の社領が新穂地区大野周辺に成立した。

鎌倉～室町時代　承久 3 年(1221)の承久の乱以後、佐渡は鎌倉幕府の支配下に置かれ、北条氏一門の大仏氏が佐渡守護に任命された。その守護代として相模国から入国した本間氏は、その支配を佐渡全土に広げていき、自身の支配地に氏神である八幡宮を建立し流鏑馬などの神事を執り行うなど、東国の文化を移入させた。鎌倉時代後期から南北朝時代にかけては、本間庶子家による所領争いが起こったが、応永年間（1394～1428）頃には島内各地で国人衆の土着化が完了し、佐和田地区の河原田本間氏、真野地区の雑太本間氏、両津地区の久知本間氏、羽茂地区の羽茂本間氏など本間氏一族のほか、両津地区加茂の渋谷氏、金井地区吉井の藍原氏が勢力を伸ばしていった。現在も、国中平野一帯には城館跡が数多く残っており、単郭の堀や土塁を持つ新穂地区の新穂城跡・青木城跡は県史跡に指定されている。

なお、遠流の島としての佐渡には、このころ順徳上皇［1221(承久 3)］をはじめ、日蓮［1271(文永 8)］、京極為兼［1298(永仁 6)］、日野資朝［1325(正中 2)］、世阿弥［1434(永享 6)］等が流罪となり、歌・書状あるいは経典・謡本などに佐渡での足跡を残している。

戦国時代　この頃に、沢根本間氏や潟上本間氏といった新興の土豪が台頭し、島内各地で戦乱が相次いだ。その背景には、天文 11 年(1542)の鶴子銀山の発見や文禄 2 年(1593)の西三川砂金山の再開発など、新興勢力による鉱山支配がある。戦国末期には、河原田本間氏と羽茂本間氏による島を二分した争いが続いたが、佐渡は、天正17年(1589)上杉景勝の出兵により平定され、慶長 5 年(1600)まで上杉領として支配された。この間に金銀山の大開発が進められ、石見国から伝えられた坑道掘りなどの最新技術は、その後の相川金銀

山における金銀生産を可能にした。

江戸時代　慶長 5 年(1600)関ヶ原合戦以後は、佐渡は徳川幕府の直轄地として、さらに鉱山開発が進められた。慶長 8 年(1603)には、石見銀山などの代官を務めた大久保長安が佐渡代官に任命された。翌慶長 9 年に相川に陣屋（後の佐渡奉行所）が建てられると、長安による計画的な町立てが行われ、人口 4 万人ともいわれる日本有数の鉱山都市相川が誕生した。元和 4 年(1618)には奉行制が布かれ、鎮目市左衛門・竹村九郎右衛門が初代佐渡奉行となり、以後幕末までに 102 人の奉行が赴任している。17 世紀初めに隆盛を極めた鉱山は、17 世紀半ば以降には経費の増大と坑道内の出水が課題となり、金銀の生産高は減少の一途をたどるようになる。元禄 3 年(1690)に佐渡奉行となった荻原重秀は、金銀山の復興に努め、元禄 9 年(1696)坑道排水を目的とする南沢疎水道を完成させるなど、鉱山政策を行う一方で、元禄 6 年(1693)には佐渡で最初の実測検地を行い、島内の年貢高は慶長時の 2 倍の 4 万 587 石に加増された。当時の石高は 263 村で 13 万石余であったが、享保 4 年(1719)の定免制導入による年貢増徴あるいは役人の不正や飢饉の発生もあって、寛延 3 年(1750)には島内で最初の一揆が勃発し、以後、明和 4 年(1767)と天保 9 年(1838)にも一国騒動が起こった。

文化元年(1804)ロシアの南下政策の影響により海防の必要性が生じたことから、同 5 年には急遽佐渡に台場が設置された。このうち、相川地区小川台場跡は島内で唯一原型をとどめており、県史跡に指定されている。また、嘉永 3 年(1850)には佐和田地区鶴子で大筒の鋳造が行われており、その技術は後の蝋型鋳金技術（県無形文化財）に受け継がれ、昭和 35 年(1960)には佐々木象堂が重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された。

江戸期の金銀山の繁栄は、佐渡の産業や流通に大きな影響を与えた。江戸初期には、全国各地から鉱山技術者及び労働者・大工や石工などの職人・漁業者・商人・宗教者等が集まり、佐渡へ様々な風習や芸能などの文化が持ち込まれた。また、急激な人口の増加は島内の食料生産の発達を促し、海岸段丘や丘陵部の新田開発、砂丘地での野菜栽培が進められる一方で、鉱山で使用する炭・木材等の生産資材確保のため、山林は「御林」として奉行所管理のもと厳しい伐採調整が行われた。さらに、鉱山の発展は海運産業にも大きな影響を与え、越後からの米、東北地方からの炭・薪、北陸地方からの油・衣料・紙などの移入港として、五十里や沢根など真野湾側の港町が栄えた。小木港は金銀の積出港として成立発展したが、鉱山の衰退が始まる寛文年間(1661～73)頃からは、西回り航路の寄港地として相川を凌ぐ繁栄をみせた。

その他の産業においては、宝暦元年(1751)に、禁止されていた島内物資の他国出しが許可されたことから、松前などとの交易が盛んとなり、それまでは島内で消費された竹細工・藁細工・藤細工・串柿などが移出された。また、元文 5 年(1741)以降は、島の海士集団を中心に生産された干鮑・煎海鼠が、中国貿易における長崎俵物として盛んに製造された。工業としては、天保年間(1830～43)には、羽茂の氏江市郎兵衛によって製造された千歯扱きが諸国で評判となり、越後・信州・出羽・会津方面へ大量に移出された。さらに、19 世

紀初頭には、相川の黒沢金太郎が地元の土に金銀製錬滓である「カラミ」を釉薬に用いた施釉陶器の生産に成功し、島内における本格的な窯業の端緒となった。

文化の面においても江戸期の社会的背景が大きく影響し、金銀山からの富の産出や人の交流によって伝播した様々な芸能が、現在も島の各地で伝承されている。自身も金春流能楽師の系譜を引くと伝えられる大久保長安が伝えた能は、江戸で武家階級に愛顧されたが、佐渡においては農民の文化として定着し、幕末から明治期には兼用を含め 200 棟余の能舞台が存在した。さらに、鉱山の繁栄や作業の安全を祈願する「やわらぎ」、鉱業技術の交流があった甲斐国から伝播したとされる「春駒」など、金銀山との関係の深い芸能が 17 世紀から演じられた記録が残っている。また、海運の影響から海を介し伝えられた文弥人形、鬼太鼓や小獅子舞などの獅子舞系芸能、「佐渡おけさ」や「山田ハンヤ」といった民謡のほか、労作唄、花笠踊りや御田植神事などの田楽系芸能、「つぶろさし」などの神楽系芸能に代表される近世以前の芸能も伝えられている。このように、近世末まで連綿と受け入れられた芸能の蓄積も島の文化の重層性を示す要因の一つとなっている。

明治時代以降　佐渡の近代化は、明治元年(1868)の夷港の開港に始まる。同年に開港した新潟港の補助港となった夷港は、明治 19 年(1886)の相川－両津間県道の開設に伴い、佐渡と新潟とを結ぶ主要航路として、それまでの小木・赤泊港に代わり急速に発展した。

佐渡金銀山は、幕末まで生産量が大幅に減少していたが、明治政府は、明治 2 年(1869)に官営の佐渡鉱山として経営改革に着手し、欧米の最新技術を積極的に取り入れ近代化を図った。明治 10 年(1877)には日本初の西洋式竪坑である大立竪坑が完成し、明治 18 年(1885)には、鉱山局長に就任した大島高任によって高任・北沢・大間地区などにおいて諸施設の整備が行われ、佐渡鉱山は日本を代表する近代鉱山の地位を確立した。その後、明治 29 年(1896)に佐渡鉱山は三菱合資会社に払い下げられ、昭和 10 年代には国策として増産が課せられ、北沢地区には「東洋一」と称された浮遊選鉱場等の施設が整備された。しかし、戦後は鉱石の品位低下と無計画な採鉱により昭和 27 年(1952)に鉱山の大縮小が断行され、平成元年(1989)に操業を休止した。

窯業の分野では、明治以降、佐渡鉱山の坑内から出る酸化鉄を大量に含む赤色の無名異土を原料とした無名異焼が三浦常山や伊藤赤水によって広められ、その流れをくむ三浦小平次が平成 9 年(1997)に、5 代伊藤赤水が平成 15 年(2003)に重要無形文化財保持者（人間国宝）に指定されている。

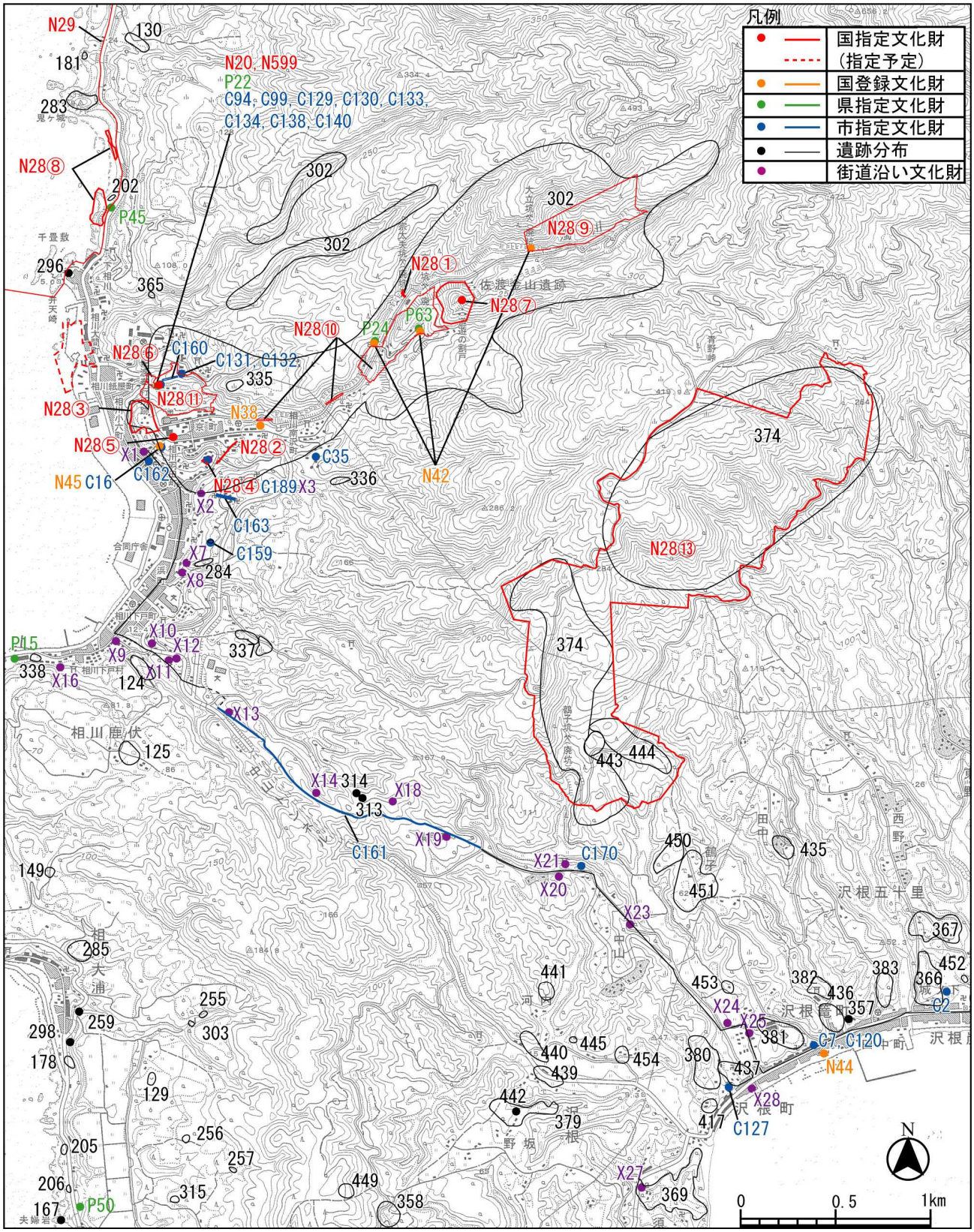

図2－1　史跡佐渡金銀山遺跡周辺の文化財

表2－1　史跡佐渡金銀山遺跡周辺指定文化財一覧表

国指定（周辺国指定文化財一覧）

NO.	名称	種別	指定年月日	所在地
N20	佐渡海府の紡織用具	重要民俗文化財	昭和51.8.23	相川坂下町（相川郷土博物館）
N28	佐渡金銀山遺跡	史跡		下相川他
	①宗太夫間歩			
	②南沢疎水道			
	③佐渡奉行所跡		平成6.5.24	
	④大久保長安逆修塔・河村彦左衛門供養塔		追加指定	
	⑤鐘楼		平成21.7.23	
	⑥御料局佐渡支庁跡		平成22.2.22	
	⑦道遊の割戸		平成23.2.7	
	⑧吹上海岸石切場跡		平成24.1.24	
	⑨大立地区			
	⑩間ノ山・高任地区			
	⑪北沢地区			
	⑫戸地地区			
	⑬鶴子銀山跡			
	⑭片辺・鹿野浦海岸石切場跡			
N29	佐渡海府海岸	名勝	昭和9.5.1	
N599	新潟県佐渡奉行所跡出土品一括	考古資料	平成23.6.27	相川坂下町（相川郷土博物館）

国登録（周辺国登録文化財一覧）

NO.	名称	登録区分	指定年月日	所在地
N38	旧相川拘置所(事務所棟、炊事・倉庫棟・居房棟、事務所門及び塀)	建造物	平成18.10.18	相川新五郎町
N42	佐渡鉱山(旧佐渡鉱山大立竪坑櫓、大立竪坑捲揚室、道遊坑、間ノ山下アーチ橋・間ノ山上アーチ橋)	建造物	平成20.3.7	相川下相川
N44	本光寺(本堂・鐘楼・大門・塀)	建造物	平成20.3.7	佐和田沢根籠町
N45	旧相川税務署(本館・書庫・門及び袖塀・石積)	建造物	平成21.8.7	相川長坂町

県指定（周辺県指定文化財一覧）

NO.	名称	指定区分	指定年月日	所在地
P15	銅造観世音菩薩立像	彫刻	昭和59.3.27	相川鹿伏
P22	川上家文書	古文書	平成11.3.30	相川坂下町（相川郷土博物館他）
P24	佐渡鉱山関係施設等設計図一括	歴史資料	平成15.3.28	相川惣徳町
P45	相川鉱山遺跡・鎮目市左衛門の墓	史跡	昭和33.3.22	相川下相川
P50	浜端洞穴遺跡	史跡	昭和48.3.29	相川高瀬
P63	佐渡鉱床金鉱石	天然記念物	平成21.3.24	相川下相川

市指定（周辺市指定文化財一覧）

NO.	名称	指定区分	指定年月日	所在地
C2	励風館	建造物	平成16.3.1	佐和田沢根五十里
C7	沢根篭町善宝寺	建造物	平成16.3.1	佐和田沢根籠町(総鏡寺境内)
C16	旧相川裁判所	建造物	平成16.3.1	相川米屋町
C35	内陣欄間と御拝	彫刻	平成16.3.1	相川南沢町（長明寺）

C94	高野家文書	古文書	平成16.3.1	相川坂下町（相川郷土博物館）
C99	佐渡奉行所関連絵図	古文書	平成16.3.1	相川江戸沢町他（相川郷土博物館他）
C120	芭蕉荒海句碑	歴史資料	平成16.3.1	佐和田沢根籠町（総鏡寺）
C127	白山神社絵馬	民俗文化財	平成16.3.1	佐和田沢根籠町(八幡新町)
C129	相川音頭絵馬	民俗文化財	平成16.3.1	相川坂下町（相川郷土博物館）
C130	観音堂奉納絵馬	民俗文化財	平成16.3.1	相川坂下町（相川郷土博物館）
C131	七福神演能絵馬	民俗文化財	平成16.3.1	相川下山之神町(大山祗神社)
C132	やわらぎ絵馬	民俗文化財	平成16.3.1	相川下山之神町(大山祗神社)
C133	級織り用具と製品	民俗文化財	平成16.3.1	相川坂下町（相川郷土博物館）
C134	相川金山鉱具	民俗文化財	平成16.3.1	相川坂下町・下相川（相川郷土博物館他）
C138	金掘り絵馬	民俗文化財	平成16.3.1	相川坂下町（相川郷土博物館）
C140	大提灯武者絵	民俗文化財	平成16.3.1	相川坂下町（相川郷土博物館）
C159	黒沢金太郎窯跡	史跡	平成16.3.1	相川羽田村
C160	寺町に至る石段	史跡	平成16.3.1	相川南沢町他
C161	中山旧道	史跡	平成16.3.1	相川下戸村・佐和田沢根
C162	西坂	史跡	平成16.3.1	相川長坂町
C163	厳常寺坂	史跡	平成16.3.1	相川坂下町他
C170	中山一里塚	史跡	平成16.3.1	佐和田沢根
C189	大安寺のタブ林	天然記念物	平成16.3.1	相川江戸沢町

周辺遺跡一覧

NO.	遺跡名	種別	所在地	年代
124	向の畑	遺物包含地	相川下戸	縄文
125	開	遺物包含地	相川鹿伏	縄文
129	相鱈	遺物包含地	相川大浦	縄文
130	小川貝塚	遺物包含地	小川	縄文
149	大上	遺物包含地	小川	縄文
167	夫婦岩洞穴	遺物包含地	高瀬	弥生・古墳
178	大浦平田	遺物包含地	相川大浦	古墳
181	ミル目	遺物包含地	下相川	古墳
202	下相川吹上	製塩跡	下相川吹上	古墳
205	大漁	製塩跡	高瀬	古墳
206	助岩岩陰	製塩跡	高瀬	古墳
238	姫津	遺物包含地	姫津	平安
255	石地河内窯跡	窯跡	相川大浦	平安
256	苗代の腰窯跡	窯跡	高瀬	平安
257	高瀬穴釜窯跡	窯跡	高瀬	平安
259	京塚	墳墓	相川大浦	鎌倉
283	鬼ヶ城	遺物包含地	小川相川	戦国
284	羽田城跡	城館跡	相川羽田	戦国
285	大浦城跡	城館跡	高瀬	戦国
296	富崎不動摩崖仏	摩崖仏	相川鹿伏	江戸
298	平田摩崖仏	摩崖仏	相川大浦	江戸
302(N28)	佐渡金山	鉱山跡	佐渡市	江戸
303	大浦鉱山跡	鉱山跡	相川大浦	江戸
313	キリシタン塚A	塚	相川下戸	
314	キリシタン塚B	塚	相川下戸	
315	丸山塚	塚	高瀬	

335	中山之神	遺物包含地	下相川	縄文
336	イチカ潟	遺物包含地	相川羽田	縄文・平安
337	道違	遺物包含地	下戸	平安
338	野萩	遺物包含地	相川鹿伏	平安
357	沢根古墳	古墳	沢根	古墳
358	野坂穴釜	製鉄跡	沢根	奈良
365	国府畔	城館跡	八幡字辰巳	平安～鎌倉
366	五十里城跡	城館跡	沢根五十里	室町
367	五十里西野城跡	城館跡	沢根五十里	室町
369	沢根城跡	城館跡	沢根	室町
374(N28)	鶴子銀山跡	鉱山跡	沢根	室町
379	野坂城跡	城館跡	沢根	
380	沢根元城跡	城館跡	沢根	
381	田上城跡	城館跡	沢根	江戸
382	鶴子城跡	城館跡	沢根	
383	田中城跡	城館跡	沢根	
417	沢根本町	遺物包含地	沢根	平安中世
435	沢根五十里田中	遺物包含地	沢根五十里	平安・中世
436	沢根籠町	遺物包含地	沢根籠町	古墳・平安
437	専得寺	遺物包含地	沢根	
439	河内垣ノ内	遺物包含地	沢根	平安
440	河内道下	遺物包含地	沢根	平安
441	河内舞台	遺物包含地	沢根	中世
442	内木の塚	塚	沢根	
443(N28)	鶴子鉱山代官屋敷跡	遺物包含地	沢根	安土桃山～江戸
444(N28)	鶴子荒町	遺物包含地	沢根	安土桃山～江戸
445	河内永慶寺跡	寺院跡	沢根	
449	野坂鉱山跡	鉱山跡	沢根	近世
450	鶴子床屋跡	生産遺跡	沢根	近世・近世代
451	鶴子田中	集落跡・社寺跡	沢根	近世
452	西野経塚	塚	沢根	中世
453	田上丸山	散布地	沢根	中世
454	河内平田	散布地	沢根	平安

歴史の道周辺の文化財

NO.	文化財名	年代
X1	相川道路元標	
X2	塩竈神社	寛永6年
X3	大安寺	慶長11年
X7	金毘羅神社	寛永17年
X8	弾誓寺	寛永13年
X9	下戸番所跡	慶長９年
X10	大日堂	貞和５年移転
X11	念仏車	享和元年再建
X12	処刑場跡	
X13	中山の供養塔	天明８年
X14	庚申塔	天保３年
X16	善知鳥神社	慶長５年
X18	船手投の墓地	慶長９年
X19	亀甲石	
X20	法華塚	元禄１３年
X21	中山の茶屋跡	慶安年中
X23	鬼坂	
X24	田上清水	
X25	田上地蔵堂	
X27	元町通り	
X28	沢根番所跡	慶長年間

（３）自然環境

①　気候

佐渡島の気候は佐渡沖を流れる対馬暖流の影響もあり、冬は本土よりも気温が高く、夏は涼しいため一年を通して比較的過ごしやすいのが特徴である。

冬は大佐渡山地が日本海の外海に対して屏風のように屹立し、冬の厳しい北西風から国中平野を守っており、小佐渡山地は日本海を北上する対馬暖流の影響を受け、温暖な特性があり、相川では対岸の新潟地方と比べ気温の平年値が 14.1℃と比較的高く、年間降水量も 1,500㎜程度と少ない。

また、日本海側の気象区域に属する新潟県は豪雪で有名であるが、佐渡島は県内でも降雪量の少ない地域の一つで、相川における最深積雪が 2001 年から 2010 年の 10 年平均で 16.4 ㎝、最大でも 41 ㎝である。

表 2－2　各地の気象データ

	年間平均気温 (℃)				年間降水量 (㎜)				最深積雪量 (㎝)			
年度	佐渡	新潟	長岡	高田	佐渡	新潟	長岡	高田	佐渡	新潟	長岡	高田
2001	13.9	14.0	13.1	13.6	1,231.5	1,708.0	2,101.0	3,313.0	22	55	121	141
2002	14.2	14.2	13.3	13.9	2,009.5	2,283.0	2,663.0	3,072.5	18	27	38	79
2003	13.8	13.8	13.0	13.7	1,439.0	1,688.0	2,109.0	2,511.0	41	27	65	54
2004	14.7	14.7	14.0	14.6	1,763.5	1,917.5	2,681.0	2,694.5	17	22	86	87
2005	13.7	13.8	12.9	13.5	1,551.5	1,813.0	2,618.0	3,060.0	10	24	153	126
2006	13.8	13.9	13.0	13.5	1,482.5	2,014.5	2,451.0	3,076.0	13	24	110	162
2007	14.4	14.4	13.6	14.1	1,244.0	1,748.5	2,508.0	2,449.0	0	6	31	36
2008	14.4	14.2	13.5	14.0	1,311.0	1,530.0	2,151.5	2,346.5	8	10	75	77
2009	14.0	14.1	13.5	14.0	1,561.5	1,792.5	2,238.0	2,230.5	9	21	36	27
2010	14.5	14.4	13.7	14.1	1,819.5	2,072.0	2,554.5	3,042.0	26	81	114	161
平均	14.1	14.2	13.4	13.9	1,541.4	1,856.7	2,407.5	2,779.5	16.4	29.7	82.9	95.0

（気象庁ホームページより）

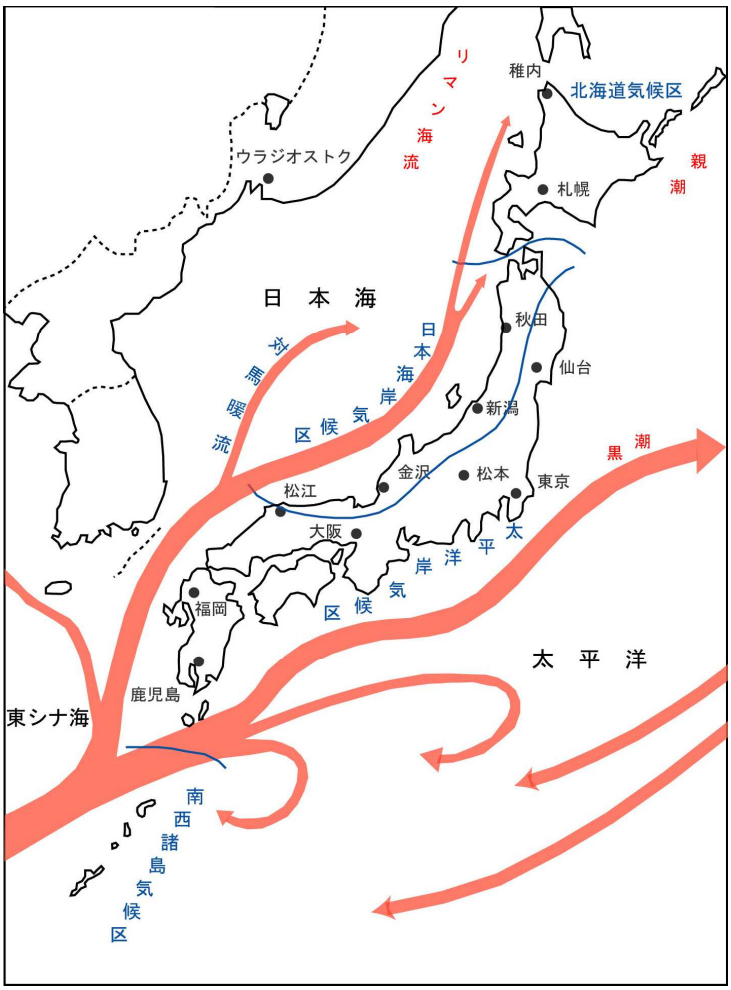

図 2－2　海流と気候区分

②　動物

佐渡島と本州とが陸続きであった氷河期に渡来した動物は、その後に海峡ができ移動経路を断たれことから、現在の島内には移動範囲の狭い小型哺乳類であるサドノウサギやサドモグラ、サドトガリネズミなどの固有種が生息する。また、同様に歩行性昆虫のサドマイマイカブリ、サドコブヤハズカミキリや陸産貝類のサドマイマイ、サドキセルガイも佐渡固有種である。

佐渡島ではニホンツキノワグマ、ニホンイノシシなど大型の哺乳類は生息せず、中型哺乳類のサドノウサギのほか、江戸期の金銀製錬で使用する鞴の内張に皮を利用したホンドタヌキ、同じく江戸期に持ち込まれたホンドイタチ、サドノウサギ駆除のため昭和期に移入されたホンドテンの 4 種が生息する。ホンドタヌキは、佐渡の動物相の頂点に立つ種で、近年では急激に増殖し島内各地に生息する。また、逆にサドノウサギは生息数が減少し、大佐渡山地と小佐渡山地の一部で確認されるだけとなり、新潟県の準絶滅危惧種に指定された。そのほか陸生の小型哺乳類として、国内各地に生息するニホンドブネズミ、ホンド

ハツカネズミ、ニホンクマネズミ、アブラコウモリ、ニホンキクガシラコウモリなどが確認されている。

昆虫類では、佐渡固有種のほかセアカオサムシ、ハンミョウなど歩行性の甲虫と、セミ類、ヤンマ科やトンボ科のトンボ類、アゲハチョウ科のチョウ類、ガ類など飛翔力の強い昆虫類が生息する。

佐渡は特別天然記念物トキの日本最後の生息地として知られるが、鳥類は新潟に比して100種ほど少ない300種が確認されており、佐渡固有のサドカケスや基型のキタキジも生息する。また佐渡は、ユーラシア大陸と日本列島との間に位置することから、渡り鳥の中継地あるいは繁殖地となっており、大陸からの鳥類も飛来する。

③　植生

寒地・暖地両系の植物の境界線とされる北緯38度線が佐渡島の中央を通過し、対馬暖流の影響もあって、寒地・暖地の植物の棲み分けがみられる。このような条件の下、島の植物相は1,700種を数え複雑である。

冬の季節風の影響をさけた丘陵部は暖帯気候となっており、常緑広葉樹が成立し、スダジイ、タブ、アカガシ、ウラジロガシ、ヤブツバキなどが生育している。一方、日本海を南下する寒流や季節風の影響を受ける山地は温帯気候であり、落葉広葉樹林が成立し、ブナやミズナラをはじめとする雪国特有の植物もみられる。また、大佐渡山地の尾根筋では、海抜およそ1,000mでありながら、高山・寒地植物がみられる。

佐渡における植生はきわめて豊かであると同時に、ツワブキのように北限分布をなすものとエゾノコギリソウのように南限分布を示すものとが同地で生育するという特殊性も有している。

相川金銀山跡の所在する相川地区の原植生は、シイ・タブである。このうち宗太夫間歩、近代遺跡（大立地区）近辺では、デイサイト(石英安山岩)の岩塊にアカマツが優占して生育する。またアカマツに混じりシイやヤブツバキが混生し、林のふちには、オモト・ツワブキ・キズタ・ヤブコウジ・ベニシダなどの暖帯林要素植物が生育する。林相はアカマツ林で土地的極相林であるが、その混生植物から判断すればシイ林域である。この地帯は海岸からおよそ2km、海抜100mの位置にあり、相川におけるシイ林域の上限である。

上町海岸段丘の主な植生として、寺町付近においては、タブノキ群落相とタブノキ～エノキ群落相が見られ、前者は 300 年生以上とみられるタブノキ群落からなり、低木や草本類が極めて少なく、また後者は、段丘崖を墓地として利用している場所で森林利用は低く、50～150年生の群落からなり、前者と比較して低木や草本類が多く樹種も多様である。奉行所付近では、下草刈り等の管理により維持されているクロマツの単層林と、クロマツ林として管理されていたが50年ほど維持管理されていないクロマツ～タブノキ群落が見られる。

下相川海岸段丘や鹿伏海岸段丘の主な植生として、エゾイタヤ～エノキ群落，コナラ群落など薪炭利用の跡である株立ちの広葉樹が分布する。また、タブノキーネザザ群落，カ

シワータブノキ群落が北西風の直接当たる北沢浮遊選鉱場西側に分布し、風衝地に強いカシワもよく生育するが、50 年生程の林で、北沢浮遊選鉱場の閉鎖後からの植生と思われる。そのほか、アズマネザザ群落が耕作地跡や宅地跡にパイオニア植物として分布する。

上町海岸段丘の段丘崖には、クロマツの単層林やタブノキの極相林など、人の意思による維持管理がしっかりと入り、ある種の禁忌のもの、結界的なものとして極端なまでに丁寧に守られてきた植生がみられる。言うなれば「鎮守の保護林」である。これに対して上相川や鹿伏などの段丘崖にはタブノキやヤブツバキも所々に見られるものの、ほとんどは薪炭林利用や堆肥利用できる落葉広葉樹で、「資源の循環利用林」である。

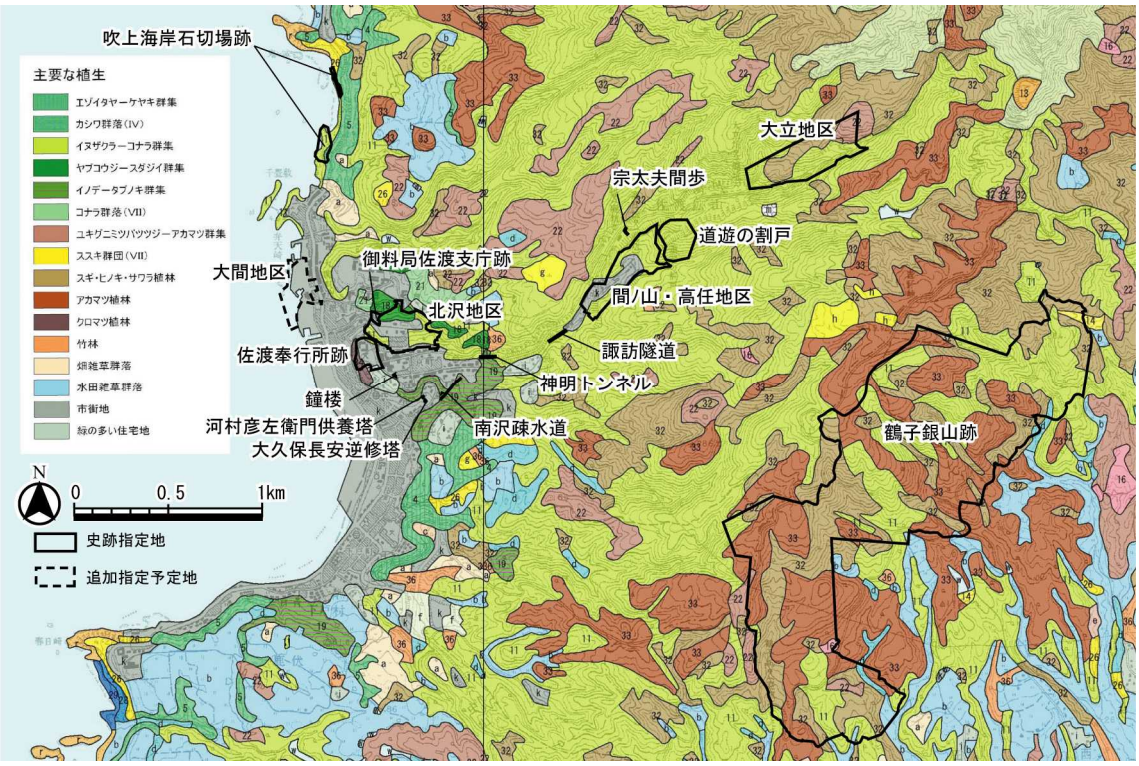

図 2−3　相川地区植生図（第 6・7 回自然環境保全基礎調査植生調査より）

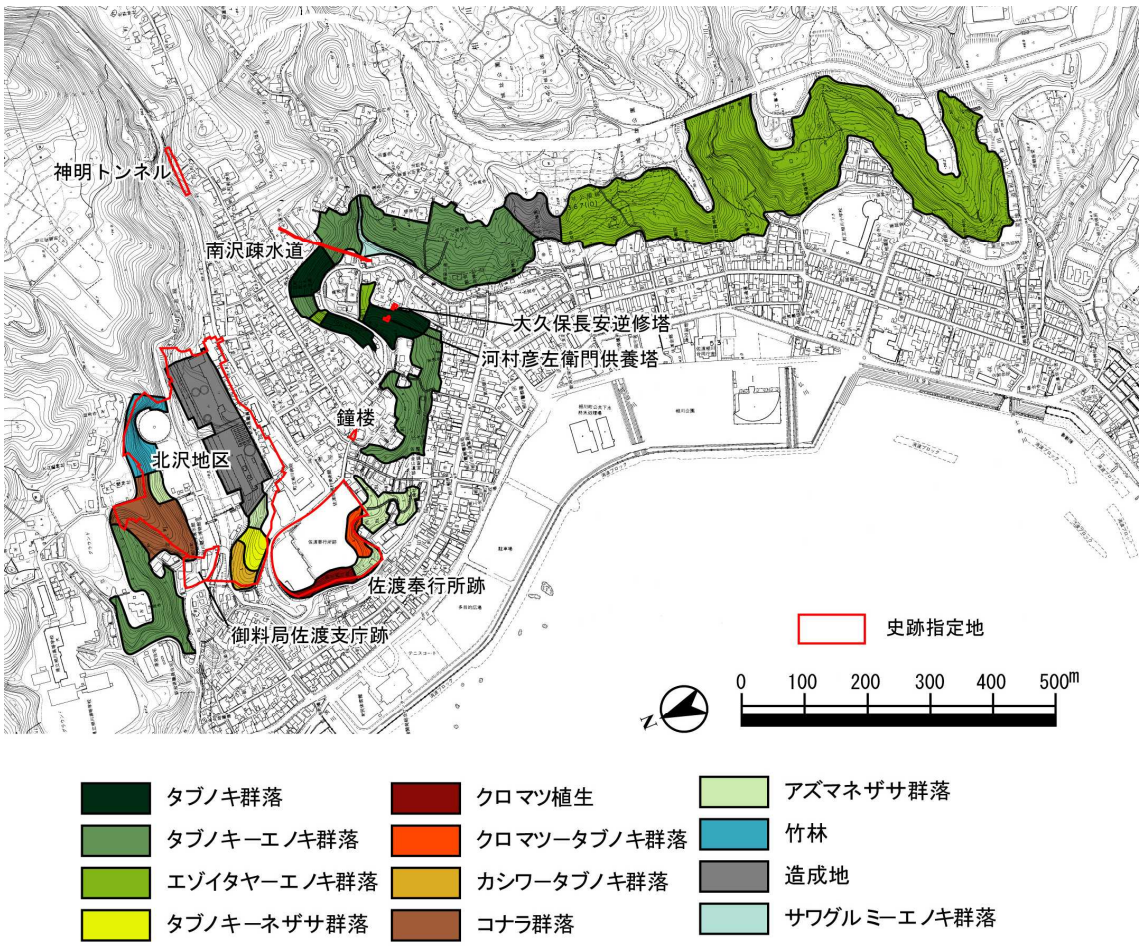

図 2－4　佐渡市相川地区　海岸段丘（段丘崖）植生図

④　地質

佐渡島における地層の大部分は、火山によって形成された火山岩類及び日本海の海底で堆積した地層が重なって形成されたものである。このうち道遊の割戸や鶴子銀山などが立地する大佐渡山地を構成する地質は、古第三紀・斬新世（2300 万年前）から新第三紀中新世初期（1800 万年前）に堆積したグリーンタフである。また、その他の岩石として、凝灰岩、玄武岩、硬質頁岩がみられる。グリーンタフはデイサイト（石英安山岩）や安山岩の溶岩類やそれらの火砕岩からなる火山噴出物を主体とし、堆積している層を相川層群と呼んでいる。

さらに、日本海が誕生した約 1700 万年前には海浸期に伴う砂岩・礫岩・シルトを主体とする堆積岩からなる下戸層・鶴子層・中山層が形成され、これらの地層が隆起運動により変形しながら海上に現れ、佐渡島が誕生したとされる。

金銀鉱床は、マグマの熱水作用によってできる石英脈の中に多く濃縮して含有される。大佐渡山地に分布する金銀鉱床の多くは、相川層群を貫く熱水性鉱脈鉱床で、鉱床を含む地層は、入川層（大立層）・相川層に限られる。佐渡島内にはいたるところに石英脈が分布

し、代表的なのが相川層中の含金石英脈で、相川金銀山をはじめ、鶴子銀山などが該当する。一方、西三川川流域の砂金鉱床は下戸層の礫岩層の基底部分に濃集している。なお、佐渡島全域において２億年以上の大陸基盤岩の形成から、日本海や佐渡島の誕生・変遷を物語る地質遺産が観察出来ることから、世界ジオパーク＊（地球活動の遺産を主な見所とする公園）の認定に向けて取り組んでいる。

＊ジオパーク
ユネスコの支援により 2004 年に設定された世界ジオパークネットワークにより、世界各国で推進されており、2011 年４月現在で糸魚川等４つの世界ジオパーク、10 の日本ジオパーク（日本ジオパーク委員会が認定）がある。認定条件には、地質遺産の確実な保護、教育・普及活動、明確な区域の確定等が定められている。

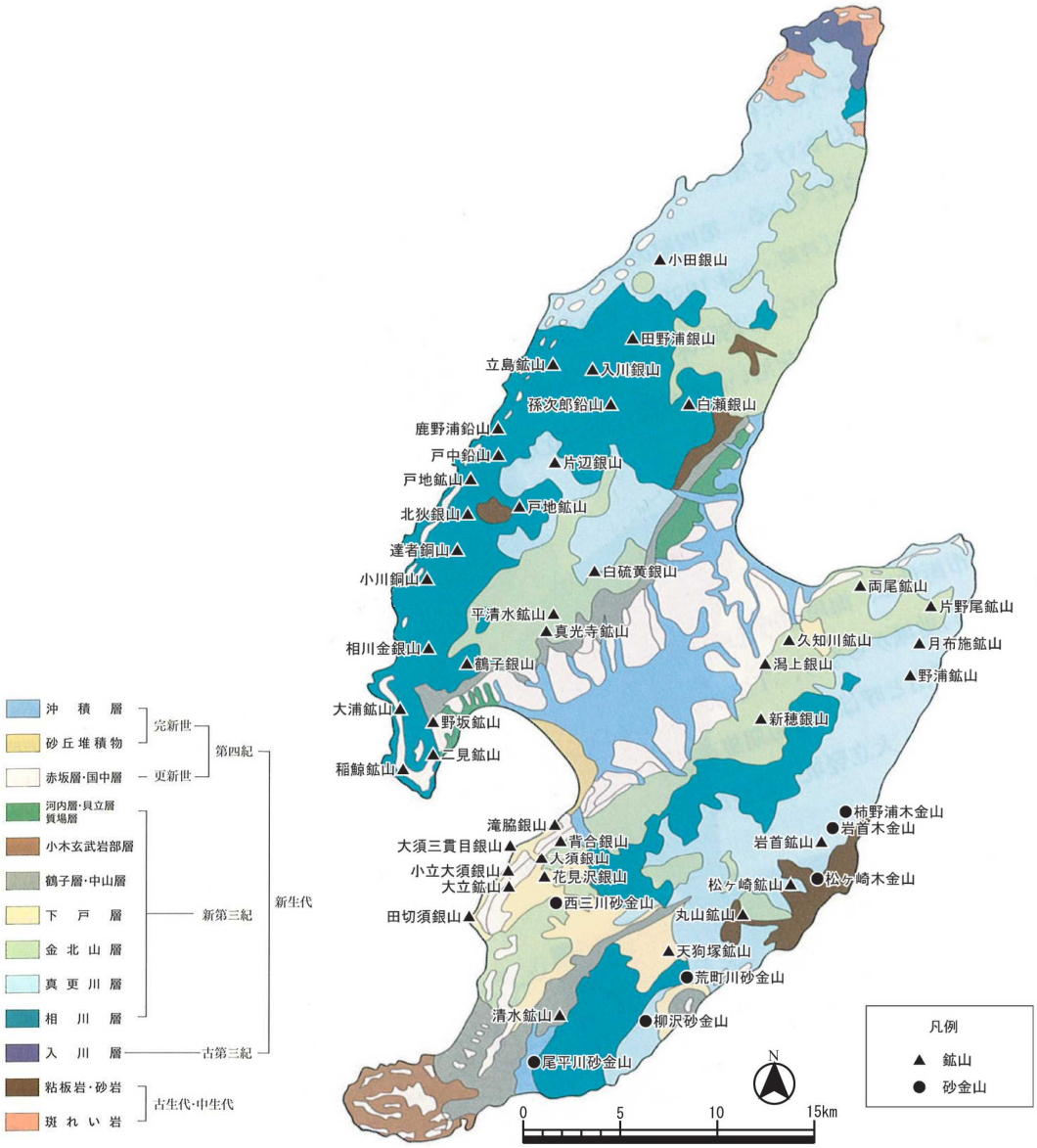

図 2－5　佐渡島内の地質概略図（新潟県 1989 を一部変更）

２．遺跡の概要

（１）佐渡島内の金銀鉱山遺跡と史跡指定された遺跡

佐渡島内には、採掘跡など鉱業生産の痕跡を示す遺跡が 50 か所ほど確認されている。中でも、平安時代にまで起源が遡るとされる「西三川砂金山」、江戸時代以前に開発された「鶴子銀山」と「新穂銀山」、江戸期以降の国家財政を支えた「相川金銀山」の 4 鉱山が佐渡の鉱山史を物語る上で重要な遺跡であり、各時代の鉱業技術の変遷を示すものである。

今後指定を検討中の遺跡も含めた史跡は、『今昔物語集』にも記述があり佐渡最古とされる「西三川砂金山」、16 世紀に佐渡最大であった「鶴子銀山」と「新穂銀山」、江戸時代以降の我が国の鉱山を代表する「相川金銀山」、明治時代以降の鉱業近代化を牽引した近代遺跡などから構成される。

佐渡金銀山遺跡は、中世から近代に至るまでの採鉱技法、あるいは選鉱、製錬技術など数百年間にわたる鉱山技術の変遷が理解されるとともに、金銀生産を支えた佐渡奉行所や吹上海岸石切場など鉱業生産に関わった遺構群によって、各時代の我が国における鉱山経営の総体を知ることのできる史跡である。

表 2－3　佐渡島内鉱山遺跡一覧表

№.	地区名	鉱山名(別名)	鉱山種別	時代	分布調査	遺跡周知化	出典	絵図資料	備考
1	両津	白瀬銀山	銀山	江戸	無	無	佐渡年代記 佐渡国略記		
2	両津	久知川鉱山	不明	不明	無	無			
3	両津	柿野浦木金山	砂金山	中世～江戸?	無	無	佐渡国略記	舟崎文庫	史料では「黄金間歩」の名前が見える。
4	両津	岩首木金山	砂金山	中世～江戸?	無	無			
5	両津	岩首鉱山	不明	不明	無	無			
6	両津	両尾鉱山	不明	不明	無	無			
7	両津	片野尾鉱山	不明	不明	無	無			
8	両津	月布施鉱山	不明	不明	無	無			
9	両津	野浦鉱山	不明	不明	無	無			
10	相川	相川金銀山 (佐渡金山 他)	金銀銅山	江戸 ～平成元	H11～14	市№.302	佐渡年代記 佐渡国略記 他	舟崎文庫･ゴールデン佐渡所有絵図 他	県遺跡台帳「佐渡金山遺跡」、一部国指定史跡あり。H14年度分布調査報告書刊行
11	相川	茶屋平金山	金銀山	江戸	H17	無	佐渡国略記 他	舟崎文庫･ゴールデン佐渡所有絵図 他	開発時一鉱山として成立、後に相川金銀山の一鉱区となる。
12	相川	小田銀山	銀山	江戸	無	無		舟崎文庫	
13	相川	田野浦銀山 (小野見銀山･ 高千鉱山)	金銀山	江戸･近代 ～昭和18	H11～14	市№.299	佐渡年代記 佐渡国略記 他	ゴールデン佐渡所有近代鉱区図	県遺跡台帳「小野見鉱山遺跡」、近代以降「高千鉱山」となる。H14年度分布調査報告書刊行
14	相川	入川銀山 (高千鉱山)	銀鉛山	江戸･近代 ～昭和18	H11～14	市№.300	佐渡年代記 佐渡国略記 他	舟崎文庫･ゴールデン佐渡所有絵図・近代図面類 他	近代以降「高千鉱山」となる。H14年度分布調査報告書刊行
15	相川	孫次郎鉛山 (入川鉛山･ 高千鉱山)	鉛山	江戸 ～昭和18	H11～14	無	佐渡年代記 佐渡国略記 他	舟崎文庫	近代以降「高千鉱山」となる。H14年度分布調査報告書刊行。報告書上「入川鉱山孫次郎山」と記載

No.	地区名	鉱山名(別名)	鉱山種別	時代	分布調査	遺跡周知化	出典	絵図資料	備考
16	相川	立島(嶋)鉱山 (高千鉱山)	金銀山	江戸・近代 ～昭和18	H11～14	市No.301	佐渡年代記 佐渡国略記 他	ゴールデン佐渡所有近代図麺類	近代以降「高千鉱山」となる。H14年度分布調査報告書刊行
17	相川	鹿野浦鉛山 (高千鉱山)	金銀銅鉛山	江戸 ～昭和18	H11～14	無		ゴールデン佐渡所有近代鉱区図	近代以降「高千鉱山」となる。H14年度分布調査報告書刊行
18	相川	片辺鉱山 (与宗鉱山・ 松尾鉱山)	銅鉛山	江戸?	無	無			
19	相川	戸地鉱山 (カッコメ鉱山・ ウノクソ鉱山)	銀山?	江戸・ 近現代?	H11～14	無			H14年度分布調査報告書刊行
20	相川	戸中鉛山	金銀銅鉛山	江戸・ 近現代?	H11～14	無	佐渡年代記 佐渡国略記		H14年度分布調査報告書刊行
21	相川	北狄銀山 (川内鉱山・ 吉兵衛鉱山)	銀山	江戸・ 近現代?	H11～14	無	佐渡年代記 佐渡国略記 他	ゴールデン佐渡所有近代鉱区図	H14年度分布調査報告書刊行
22	相川	達者銅山 (小筵山鉱山)	銀銅山	江戸・ 近現代?	H11～14	無	佐渡年代記 佐渡国略記 他	ゴールデン佐渡所有近代鉱区図	H14年度分布調査報告書刊行
23	相川	小川銅山	銅山	江戸・ 近現代?	H11～14	無	佐渡年代記 佐渡国略記 他	ゴールデン佐渡所有近代鉱区図	H14年度分布調査報告書刊行
24	相川	大浦鉱山	銀山?	江戸	無	市No.303			
25	相川	稲鯨鉱山	銀山?	不明	無	無			
26	相川	二見鉱山	銀山?	江戸・ 近現代	H11～14	市No.304		ゴールデン佐渡所有近代鉱区図	H14年度分布調査報告書刊行
27	佐和田	鶴子銀山 (西五十里銀山・ 屏風銀山)	銀銅山	室町 ～昭和21	H14～19	市No.374	佐渡年代記 佐渡国略記 他	舟崎文庫・岩木文庫・ゴールデン佐渡所有絵図 他	H19年度分布調査報告書刊行 H21年度分布調査報告書刊行
28	佐和田	野坂鉱山	銀?	江戸?	無	市No.449			
29	佐和田	真光寺鉱山	金銀山?	不明	無	無			坑道崩落により埋没という。
30	金井	平清水鉱山	不明	不明	無	無			坑道有り。
31	金井	白硫黄銀山 (白岩尾銀山)	銀山	江戸	無	無		舟崎文庫	坑道有り。
32	真野	西三川砂金山	砂金山	平安 ～明治5	H11、14	市No.879 ～883他	佐渡年代記 佐渡国略記 他	舟崎文庫・金子家・山本家 他	県遺跡台帳「笹川拾八枚」他関連遺跡のみ周知化 ※分布調査中
33	真野	花見沢銀山	銀山	江戸	H14	市No.902	川上家文書		
34	真野	大須銀山	銀鉛山	江戸	H14	市No.839	佐渡年代記 佐渡国略記 他		県遺跡台帳「大須銀山遺跡」
35	真野	大須三貫目銀山 (三貫目沢鉱山)	銀山	江戸	H14	市No.904			県遺跡台帳「三貫目沢鉱山跡」 ※大須銀山の一部か。
36	真野	滝脇銀山	銀山	不明	無	無	山本家文書	山本家	※背合銀山と同一か
37	真野	小立大須鉱山	不明	不明	H14	無			
38	真野	大立鉱山	不明	不明	無	無			
39	真野	田切須銀山 (西三川鉱山)	銀山	江戸・明治 ～大正	無	市No.887、 888	佐渡年代記 佐渡国略記 他		県遺跡台帳「田切須大野遺跡」(集落跡)、「田切須鉱山跡」
40	真野	背合銀山	銀山	江戸	無	市No.840			県遺跡台帳上地点不明 ※滝脇銀山と同一か
41	新穂	新穂銀山 (滝沢銀山・ 瀧沢銀山)	銀山	室町～江戸	H12～	市No.632	佐渡年代記 佐渡国略記 他	舟崎文庫・岩木文庫・相川郷土博物館他	※分布調査中
42	新穂	潟上銀山	銀山	不明	無	無	佐渡国略記 他	相川郷土博物館	史料では「御城間歩」の名前が見える。
43	畑野	松ヶ崎木金山	砂金山	不明	無	無			
44	畑野	松ヶ崎鉱山	金山?	不明	無	無			坑道有り。
45	畑野	丸山鉱山	不明	不明	無	無			
46	羽茂	尾平川砂金山	砂金山	不明	無	無			※尾平川流域か
47	羽茂	清水鉱山	不明	不明	無	無			
48	赤泊	天狗塚鉱山	金山?	不明	H22	無			坑道有り。
49	赤泊	荒町川砂金山	砂金山	不明	無	無			※天狗塚鉱山下流部の河川
50	赤泊	柳沢砂金山	砂金山	不明	無	無			※柳沢川流域か

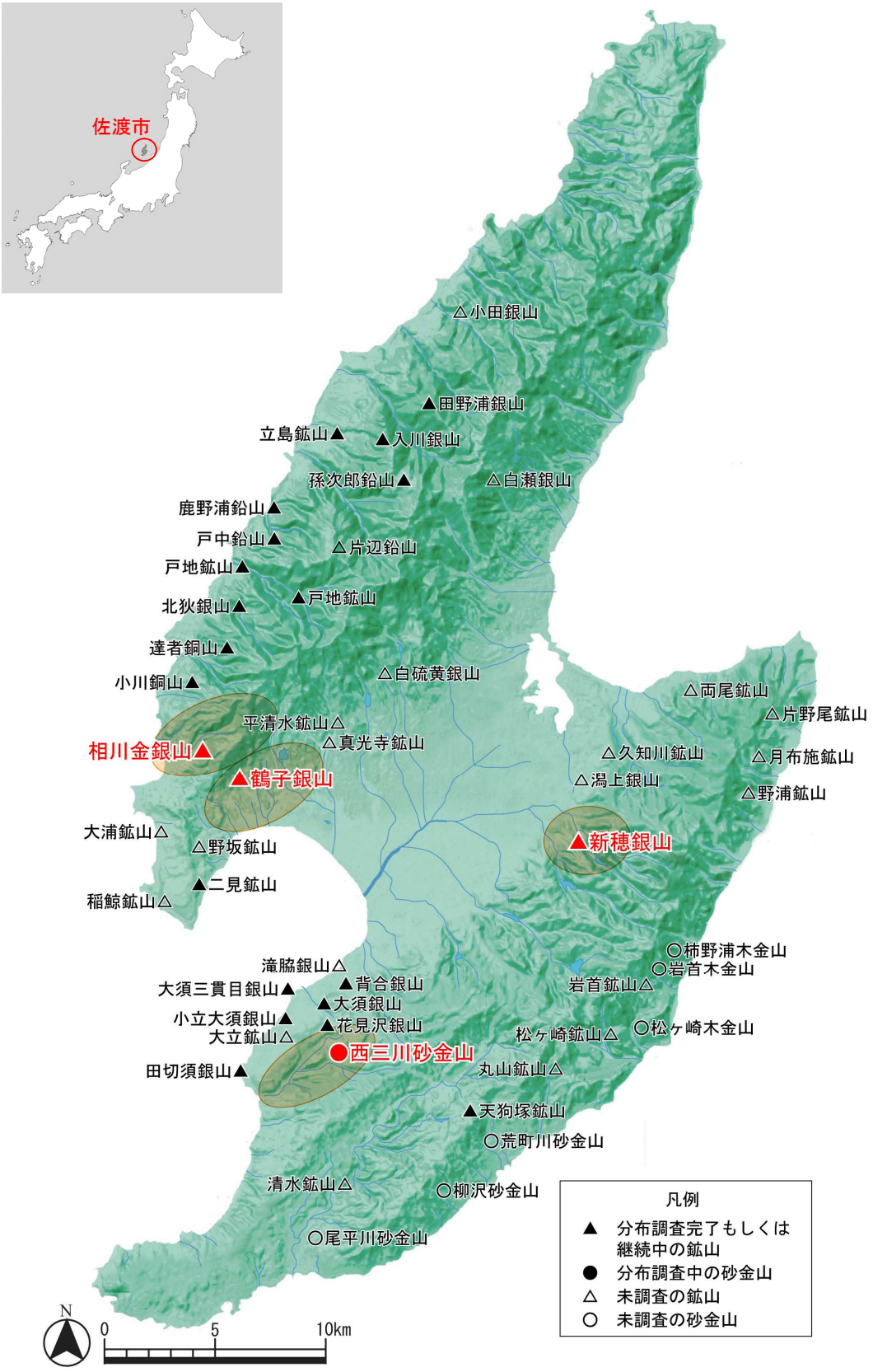

図2-6　佐渡島内鉱山遺跡分布図

（２）史跡の位置

史跡佐渡金銀山遺跡は、相川市街地を中心に分布する佐渡奉行所跡など江戸期の遺跡及び近代の遺跡群、近代遺跡である大立地区に近接する鶴子銀山跡、また相川市街地の東北端に位置する吹上海岸石切場跡、さらに東北側に位置する片辺・鹿野浦海岸石切場跡から構成される。

相川の市街地は、海岸部の低地に沿って南北に延びる「下町」地域と、緩い傾斜をもった段丘上の東西に延びる「上町」地域からなり、Ｔ字状を呈している。さらに、ここより東方の山奥に「山の内」地域が広がり、古道を介し鶴子銀山跡へ通じている。鶴子銀山跡は山の内地域から南側にある沢根から相川下戸村の山林に立地する。また、この山の内の間歩分布域に道遊の割戸が位置する。

道遊の割戸の北西側には近代の間ノ山・高任地区が隣接し、西北には大立地区が所在する。さらに道遊の割戸から西南には宗太夫間歩が位置する。

相川市街地は水金沢と濁川、間切川（南沢）によって南北に3つに分断されるが、濁川と間切川によって形成された上町台地と呼ばれる南側の尾根の先端部に佐渡奉行所跡と鐘楼が立地する。

相川市街地の濁川を中心とする南側の上町台地と北側の下山之神台地に挟まれた沢の両岸に、近代遺跡の北沢地区が位置し、その西端には御料局佐渡支庁跡が所在する。また上町台地の南端に隣接する下寺町区域に、大久保長安逆修塔・河村彦左衛門供養塔が所在する。

吹上海岸石切場跡は、相川市街地の北方、下相川地内の海岸段丘崖下の「吹上」とよばれる海岸部の標高0～20m付近に立地しており、国の名勝である佐渡海府海岸（願から小田、入川から下相川まで）の範囲に含まれている。また片辺・鹿野浦海岸石切場跡と近代遺跡の戸地地区は、吹上海岸よりさらに北側の外海府海岸沿いに所在し、片辺・鹿野浦海岸石切場跡も国名勝の佐渡海府海岸の範囲内である。

３．佐渡金銀山遺跡の価値

（１）史跡佐渡金銀山遺跡の価値

佐渡金銀山遺跡は、それぞれの時代に応じて国内外から金銀生産の技術を導入し、発展させたことにより、中世から近代の昭和時代までの鉱業技術の変遷と、我が国の鉱山経営の歩みを示す遺跡である。

17 世紀以前に石見から導入された灰吹法をはじめ、焼金法などの金銀を分離する新手法や、寄勝場に代表される工場制手工業に基づく運営形態など、近代以前の採鉱から製錬に至る一連の鉱山技術や、独自の鉱山経営手法が佐渡において発展・確立し、それらが国内の他の鉱山へと波及するなど、日本の鉱山の発展において佐渡金銀山が拠点となったことは重要である。また、佐渡金銀山では、金銀生産のみならず、奉行所における金貨幣の製造にまで至る一連の過程が一つの鉱山において完結した点も重要である。

近世までの佐渡金銀山　佐渡における金銀採掘の歴史は古代に遡り、西三川砂金山の砂金採取が最古であるとされている。本格的な鉱山開発は、16 世紀中頃、露頭掘りによる鶴子銀山の開発に始まり、相川金銀山の発見により最盛期を迎えた。佐渡一国を天領とした江戸幕府は有能な官吏を佐渡奉行として派遣し、奉行所による鉱山経営を進めるとともに、佐渡の金銀による幕府財政の安定を図った。17 世紀初頭、国内各地から山師を集め、最先端の測量、採掘、製錬技術を開発した結果、佐渡金銀山は、当時としては類例の少ない坑道掘りによる鉱山として、また 17 世紀前半には日本最大の金銀山として極めて重要な位置を占めるようになった。

近世の遺構　佐渡金銀山遺跡は、金銀生産に直接関連する道遊の割戸などの採掘跡や製錬跡、あるいは金銀生産を補助した石切場跡などの生産遺跡、鉱山と労働者を管理した佐渡奉行所などの政治遺跡で構成され、中世以前の砂金採取から近代化される以前までの鉱業全般に関する各要素が遺構として現存する。

近代以降の佐渡金銀山　明治時代以降の佐渡鉱山は、日本の「近代化」の歴史を物語るものである。明治維新の直前から技術の近代化が図られ、さまざまな新技術や機器が欧米から導入されたが、その多くが国内の嚆矢であり、国内の他の選鉱場、非鉄製錬所の技術の発達に貢献した。また、明治中期以降の日本人技術者による研究・開発や国内技術者の育成においても、佐渡鉱山は中心的な役割を担っていた。鉱山技術の観点からは、佐渡において開発・実用化された低品位金銀鉱を対象とした浮遊選鉱技術は、世界に例のない特有のものであり、注目される。

近代の遺構　鉱山技術は、採鉱、選鉱・製錬の工程、各工程への動力供給、物資の運搬などによるシステムを形成する。佐渡鉱山の近代遺跡は、採鉱、選鉱・製錬の各工程において稼働した中心的な施設のほか、施設間を結んだ鉱車軌道、ベルトコンベアーなどの運搬施設、発電所などの動力供給施設、鉱山への物資の搬入や生産物の搬出に使用された港湾

施設など、システムを構成する各要素が建造物や遺構として現存する。

史跡としての佐渡金銀山の価値をまとめると以下のようになる。

・中近世の佐渡金銀山では、灰吹法・焼金法など金銀生産活動における各段階の技術と新しい形態の鉱山経営手法が奉行所を中心に発展・確立した。また、明治期以降は、外国から新しい技術を導入するなど国内鉱山のリーダー的存在であった。このように、佐渡金銀山は、国内の鉱山史及び経済史を理解する上で欠くことのできない史跡である。

・佐渡金銀山遺跡には、中世から近代までの金銀鉱山に関する生産及び政治・経済的関連の遺構群とともに、鉱山絵図などの歴史資料が大量かつ良好に残っており、400 年間にわたる金銀生産システムの全容が理解される史跡である。

（２）佐渡の金銀山の文化遺産としての価値

・中国大陸から石見銀山を通じて伝来した灰吹法をはじめとし、焼金法などの金と銀を分離する手法、寄勝場に代表される工場制手工業に基づく運営形態は、佐渡において発展・確立し、国内の他の鉱山へと波及した。これらの鉱山技術及び経営手法は、明治維新後の西洋の鉱山技術の導入により、佐渡においてさらなる変容・発展を遂げ、国内の他の鉱山の発展を牽引するのみならず、東アジアの鉱山開発にも影響を与えた。

佐渡金銀山において製造された金貨幣は、江戸幕府の社会・経済体制の重要な基盤を成したことに加え、明治以降においても佐渡鉱山産出の金は、政府の基盤を支え、結果として金本位制を基準とする国際経済にも多大な影響を与えた。

このように、金を中心とする佐渡鉱山は、東アジアにおける鉱山技術及び鉱山経営の価値観の交流のみならず、世界経済における価値の交流においても、重要な役割を果たした。

・国内外の最新技術を取り入れ、400 年以上にわたって我が国の金銀生産を牽引してきた佐渡鉱山の一連の鉱山技術及び鉱山経営手法は、江戸幕府や明治政府の社会・経済体制の重要な基盤を成した。また、このような鉱山技術・鉱山経営手法に基づく文化的伝統は、良好に遺存する佐渡鉱山の遺跡・建造物や現存する鉱山都市・集落により余すところ無く例証されており、アジアの他地域の鉱山において今や見ることのできない極めて希少な物証である。

したがって、佐渡鉱山の遺産群は、アジアの鉱山技術及び鉱山経営手法に関わる文化的伝統の希有な存在である。

・露頭掘り等により形成された遺存地形、近代鉱山遺跡群等は、近世から近代にかけての鉱山技術及び経営の各段階を代表する技術の集合体の顕著な事例である。

したがって、それらの一群の事例は、近世及び近代の鉱山技術分野における人類の重要な段階を総体として表す傑出した類型である。